資料：研究報告

近世ヨーロッパ経済とオランダ

――オランダ東インド進出の経済的背景――

谷　澤　　毅

本稿は，2000年12月2日(土)から3日(日)にかけて，佐世保市西海パールシーセンター及び本学で開催された「日蘭交流400周年記念国際シンポジウム―寛容と平和の世界に向けて―」で報告した際の草稿に基づくノートである。本誌掲載に際しては，草稿の文章に大幅に手を加えるとともに簡単な注を設けることにした。

はじめに

我が国には「長崎」の名を和名に持つ蝶が生息する。アゲハチョウの仲間（Papilio）のナガサキアゲハである。ナガサキアゲハと命名されているだけに，長崎をはじめとする西日本で多く目にすることができ，後羽に尾状突起がないことにより，各地に普通に生息している類縁のクロアゲハや西日本に多いモンキアゲハとは簡単に区別することができる。さて，ここで話題にしたいのは，この蝶の和名ではなく，学名，すなわち世界各地で通用する学術上の名前である。手持ちの図鑑によれば，ナガサキアゲハの学名は Papilio memnon thunbergii Siebold という[1]。命名者のシーボルト(1796～1866年)については説明するまでもないであろう。亜種名のツンベルギとは，このドイツ人のシーボルトやケンペル（ケンプファー：

1651～1716年）と並ぶ出島の偉大な科学者であるスウェーデン人のツンベルク（ツュンベリー：1743～1828年）にほかならない。このように我々の身近に生息している蝶の名前に出島のオランダ商館で活躍した科学者の名前が残されたのは，これらオランダ東インド会社付きの医者兼科学者たちが旺盛な学問的好奇心を発揮して，我が国の動植物や国勢を克明に調査・記録して，ヨーロッパに紹介したからであるといえよう。だが，社会経済史的に見れば，そうした調査がおこなわれたのも，オランダ東インド会社が本国の意を受けて，日本に関する情報，特に有用な資源や植物の分布状況並びにそれらの商品化の可能性，すなわちオランダ経済にとって必要な新たな貿易商品の開拓に関する情報を求めていたからだとも考えることができる。

オランダの日本進出，その皮切りとなった1600年のリーフデ号の我が国への漂着は，世界史の流れの中で見ると，大航海時代もしくは「地理的発見」の時代と言われる時代の中で理解することが出来る。15世紀末以降，ヨーロッパは急速に海外に進出していき，やがて西ヨーロッパを中心とした世界経済，世界市場が形成されていく。オランダを含むヨーロッパの列強諸国は世界各地に商船隊，探検隊を派遣し，貴金属・香辛料などヨーロッパにとって必要な資源を求めて海外へと向かった。こうした流れの中で西ヨーロッパの主要国は，世界各地に交易網を張り巡らし，世界規模での商業・貿易活動を展開していくことになるが，その経済・貿易の領域においてオランダは16世紀以降ひときわ著しい発展を見せた。我が国との交流が開始された1600年は，オランダがまさに世界経済の中心へと浮上しつつあった時期に相当する。経済的繁栄を土台として様々な文化が花開いたオランダの17世紀は黄金時代と呼ばれる。17世紀を「オランダの世紀」と呼ぶこともある。オランダが経済的に繁栄していたがゆえに同国東インド会社のアジア進出，長崎との貿易関係の樹立が達成されたわけであり，そうしたアジアとの関係がまた少なからずオランダの繁栄にも貢献した。以下では，いかなる要因によりオランダが世界の商業・海運界において君臨す

るに至り，日本にまでその通商網を拡大するまでになったのか，オランダの東インド，長崎進出の経済的背景を，近世ヨーロッパ経済との関連のなかで世界経済的な視点も加味しながら検討してみることにしたい[2)]。

Ⅰ．世界経済の成立

オランダが東インド・日本へと進出していく時代の経済はいかなる状況にあったのであろうか。まず，視点を世界経済に置いてその構造を把握してみることにしよう。

ヨーロッパ経済はおよそ1500年前後に大きな構造的変化を遂げる。すなわち，コロンブス，マゼランの活躍に代表される，先にも述べた大航海時代が始まり，それに伴いヨーロッパを中心とした文字どおりグローバルな広域的経済，いわゆる資本主義世界経済が形成されていく。世界規模でもの・ひと・かねの流れが活発になり，世界市場が誕生していくのである。近年注目されている巨視的な歴史理論にⅠ．ウォーラーステインの提唱する「世界システム論」があるが[3)]，それによれば，16世紀に誕生した資本主義とは「ヨーロッパ世界経済」という性格を持ち，西ヨーロッパを中核（中心）とする世界規模での分業体制に基づく世界市場の成立を促したとされる。すなわち，その中核に位置する西ヨーロッパは工業化を推し進め，資源，食糧といった付加価値の低い一次産品を辺境（周辺）地域に位置づけられる東ヨーロッパや新大陸，アジアなどの植民地から輸入する，それに対して，これら辺境に当たる諸地域は食糧，原料の生産に特化していき，工業製品を中核地域の西ヨーロッパから輸入するという一種の役割分担が生じたとされる。さらに中核と辺境を結びつける役割を担う半辺境（半周辺）と呼ばれる地域が設定され，これら三地域それぞれの経済的な性格を規定する際，ウォーラーステインは，労働形態の違いにも注目しているが，それはともかく，このように世界経済で展開される分業には，付加価値の高い工業製品とそれの低い一次産品との交換という不平等な側面が有り，それが

軍事的な圧力等によって助長されることがあることを彼は指摘している。こうした不均等な貿易関係が継続されるなか，やがて世界経済の一方の国々は産業革命を実現させ，近代化を遂げていくのに対して，他方の国々は中核諸国の圧力のもと，経済を「低開発」化させてしまい，やがてそれは，現代にまで至る先進国・発展途上国間の経済格差という問題にまで繋がってくることになる。このように世界システム論とは，南北問題の誕生と深化という現在も未解決なまま残されている問題をも射程に含む，まさしくグランド・ヒストリーなのであるが，オランダは，そのような矛盾を含む資本主義世界経済・世界市場の拡大と深く関わりながら，ヨーロッパ，さらには世界を舞台として商業活動を展開していくのである。

世界市場が形成されつつあった当初，その経済的な中心都市は南ネーデルラントのアントウェルペンにあり，15世紀末から16世紀にかけて，この都市は空前の繁栄をみせた。ところが，ハプスブルク家による相続の結果スペインが低地地方を支配するようになると，その圧政に対する人々の不満が高まっていき，低地地域は宗主国スペインに対して反旗を翻していくようになる。やがてアントウェルペンは1585年にスペイン軍の前に陥落してしまうが，北ネーデルラントのオランダは，80年続く独立戦争（八十年戦争：1568—1648年）を経てスペインからの独立を勝ち取っていく。一方，戦争が継続されるなか，アントウェルペンの経済的繁栄はオランダのアムステルダムに受け継がれ，まもなくこのアムステルダムが17世紀の世界市場に君臨することになる。日蘭交流の始まった1600年，アムステルダムは世界市場の中心都市として急速な発展を遂げている最中であった。やがてオランダは，世界経済における最初のヘゲモニー国家へと上り詰め[4]，バタヴィアを経由して遥か日本にまで定期的に商船を派遣することが可能なまでに経済力を増していくのである。

オランダ，そしてその中心都市のアムステルダムは，なぜ世界経済の中心へと到達することができたのであろうか。そこには様々な要因が作用しているといえる。例えば，カトリック国スペインの宗教的圧力がプロテス

タント商人やユダヤ商人のオランダへの移住を促し，オランダ経済の発展に貢献したという事情が挙げられる。これら宗教難民を受け入れたということは，当時のオランダが，今回のシンポジウムのテーマ(「寛容と平和の世界に向けて」) に即していえば，それだけ「寛容」であったということになろう。しかし，東インド会社の設立や長崎を舞台とした日蘭貿易の継続性からも分かるように，やはりオランダの繁栄を見ていくうえで重視すべきは商業・貿易面での発展であろう。以下，オランダの国際商業を掘り下げて検討してみることにしよう。

II．オランダのバルト海貿易

オランダの繁栄を支えた産業部門が海運・商業であったことは比較的よく知られている。特に大航海時代に生きた人々にとって海運業は，ヨーロッパの人々に未知の世界への足掛かりを提供する最も先端的な産業として認識されていたと考えてよかろう。遠洋航海に対応すべく当時の最新の技術・知識が集約された海運業は，現在の情報・通信産業と同様，人類の可能性を切り開いていく当時のハイテク産業として位置づけることができよう[5]。オランダの位置する低地地方は，大陸ヨーロッパの水運の動脈であるライン川の河口部に当たり，しかもイギリスにとっては大陸世界の窓口に相当する。このような地理的好条件を背景として，低地地方は，早くから海運・商業の拠点としてのみならず，都市の密集地域，さらには毛織物を中心とした手工業地域としてアルプス以北のヨーロッパにおける経済的先進地域を形作ってきた。その一角を成すオランダは，地形的条件を生かして早くから鰊漁を中心とした漁業を発展させ，やがてそれが海運業・商業の隆盛へと結実していくのである。鰊漁が「オランダ発展の母」と呼ばれる所以である。

さて，近世のオランダで最も重要な商業部門はどの地域との取引であったのだろうか？我々は，いにしえのオランダ商業といえば，ともすれば本

国を遠く離れた出島を拠点とした東インド会社の冒険とロマンに満ちた航海，貿易活動を直ちに思い浮かべてしまうのであるが，東インド貿易は，オランダの発展を促した貿易部門というよりは，むしろそれまでの経済発展をある程度土台としてその上に開花した貿易部門であると考えられる。オランダを17世紀の経済大国に押し上げた同国の母なる貿易部門，それはバルト海貿易であるということをここで確認しておきたい。オランダ貿易のなかでバルト海が重要な意味を持っていたことは，例えば我が国では，本シンポジウムの報告者の一人である栗原福也先生によってもかねてより指摘されている[6]。バルト海貿易を展開させながらオランダは，ヨーロッパの国際商業に深く食い込んでいき，やがてそこで得られた富やノウハウをもとにして東インド貿易に本格的に進出していく。

まずは，オランダのバルト海進出の背景を探ってみよう。それには，パンの原料となる穀物をめぐるヨーロッパの食糧事情が関係していたと見ることができる。

中世末から近世にかけてのヨーロッパは二つの大きな危機を経験している。すなわち，ペスト（黒死病）の蔓延により大幅な人口の減少を来たしてしまった 14世紀後半から15世紀にかけての危機と，三十年戦争やイギリス革命などの大きな出来事が続く，いわゆる「17世紀の危機」である。一方，この二つの危機の時代に挟まれた16世紀は，ヨーロッパ世界経済の形成を背景とする経済の拡大期に当たる。15世紀末から17世紀初頭まで続く，いわゆる「長期の16世紀」と呼ばれるこの繁栄期は，先に述べた資本主義世界経済の形成期，大航海時代に相当する。この経済の拡大期に，ヨーロッパの西部・南部といった経済的先進地域では人口の増大が見られ，食料生産がそれに追いつかず，しばしば飢饉が発生するようになっていた。そのため増えつつある人口を賄うだけの食糧，特に穀物をいかに確保するかということが大きな課題となった。とりわけ低地地方は，都市分布密度が高く，都市人口を養うためには食糧を近郊から調達するだけでは不十分であり，遠方から穀物を調達する必要が生じていた。

このような食糧不足を解決する鍵を握っていた地域として浮上していくのが，ドイツ東部のプロイセン（プロシア）やポーランドなど，以前から余剰穀物を輸出していたバルト海南岸の穀倉地帯である。これらの地域を後背地として持つバルト海の港湾都市は穀物の積出港として位置付けられていく。かくして，オランダの船舶，商人は，これらの地域で生産される豊富なライ麦や小麦を求めて16世紀以降，目覚しい勢いでバルト海に進出していくのであるが，これはまた，従来からのバルト海貿易の構造とその担い手とを大きく変えることにも繋がった。以下，この点をも踏まえながら中世後期から近世初頭にかけてのバルト海貿易の実態について素描してみることにしたい。

オランダがバルト海に進出していく以前，中世後期（13—15世紀）にこの地域を経済的に支配していたのは，我が国ではハンザ同盟とよばれるドイツ・ハンザの商人であった。ドイツ・ハンザは，誕生と消滅の時期さえ確定することのできないはなはだ漠然とした組織であるが，あえて言えば，通商面での特権や独占的な利益の確保・維持のためにドイツ北部の港湾都市を中心に結成された都市の連合体と考えることができる。ハンザの核を成した都市はユトランド半島のつけ根のバルト海側に位置するリューベックである。今でこそリューベックはバルト海の数ある港町の一つにすぎないが，かつてはハンザの盟主と謳われ，バルト海商業において中心的な位置を占めていた[7]。ハンザの貿易の舞台であったバルト海と北海は，このリューベックと北海側のハンブルクを経由する一部水路を含む内陸路で結ばれていた。それゆえ，バルト海から北海に送られる商品は，リューベックで外航船から川船や荷車に積換えてハンブルク方面に送り出す必要があった。北欧商業の動脈のいわば喉首に当たる地点に位置し，ここで商品の積換えが必要とされたことが，ハンザの盟主として一大商品集散地へと発展していく上で極めて大きな意味を持ったのである。[8]

さて，オランダはこのリューベックを中心としたハンザの支配するバルト海に進出していく。その際オランダ商人は，ズント海峡（エーアソン海

峡）というバルト海と北海を結ぶ海峡を経由して直接船舶をバルト海に乗り入れる方法をとった。やがて穀物，それに建築や造船の資材として重要な木材といった諸原料は，オランダ商人によってもダンツィヒ（現グダニスク）やケーニヒスベルク（現カリーニングラード），リガといった都市から輸出されるようになった。ところで，穀物や木材のように商品価格が安くてしかもかさばる商品の輸送には，大きな船で，しかも積換えを行なうこと無しに目的地に輸送するのが合理的である。すなわち，まさにオランダ人が行なったように，ズント海峡を経由して大きな船舶で直接北海側に発送する方法がそうであったといえる。ところが，この海路を経由する輸送は，それまでのバルト海・北海間の積換え港であるリューベックを経由しないがゆえに，リューベックにとってそれは，自らの経済的繁栄の基盤を切り崩すに等しい意味を持ってしまう。オランダは，バルト海進出に際してこれまでの中心的な商業都市であるリューベックに大きな打撃を与えつつ，ハンザに代わってこの海域における東西ヨーロッパ間の貿易に対する支配権を確立していくのである。

表―1　ダンツィヒに寄港した船舶

	1460年	1476(75)年	1530年	1583年
合計（単位：隻）	282	666	652	2230
船籍地の内訳				
低地地方	11	160	235	1015(46%)
(オランダ)	(2)	(87)	(165)	(680)
リューベック	59(21%)	168	24	66(3%)

出典：拙稿「近世初頭のバルト海貿易」，82頁，表―1より作成。

その過程を統計データから具体的に確認してみよう。表―1は，バルト海で最も重要な穀物輸出港となったダンツィヒに寄港した船舶の数を船籍地ごとに分類したものである。寄港船舶の総数を見ると，1460年が282隻であるのに対して1583年が2230隻と著しい増加を見せており，この期間のダンツィヒにおける取引規模の増大を確認することができる。ここに示されるように，ダンツィヒは穀物輸出の増大を背景に16世紀にリューベックに

代わってバルト海最大の貿易港として発展していく。船籍地の内訳を見ると，オランダを含む低地地方からの入港の著しい増加か明らかである。すなわちその数は，1460年が11隻，1530年が235隻，そして1583年には1015隻にまで達し，ダンツィヒ寄港船舶全体に占める割合も，1583年には46%と半数近くを占めるまでになったのである。その内訳を見ると，ホラント州（オランダ）からの船舶が一番多かった。

一方バルト海・北海間の積換え港リューベックからやってきた船舶に注目してみると，1460年は59隻と寄港船舶全体に占める割合は約21%に及んでいたのに対して，1583年の66隻は全体の僅か3%を占めるに過ぎなかった。オランダ船舶の大量の入港がリューベック船舶の比率を著しく低下させていったことがわかる。オランダ船のダンツィヒへの大量入港により，バルト海・北海間の東西貿易の動脈がリューベックを経由するルートから，海路すなわちズント海峡を経由するルートへと移っていったことが，ここから読み取れるのである。こうしてオランダは，ズント海峡を経由する新たな動脈をダンツィヒと母国のアムステルダムをはじめとする港湾都市との間に打ち立て，それまでのハンザに代わって西ヨーロッパ向けの穀物貿易を核としてバルト海貿易における支配権を確立していくのである。この穀物貿易を軸としたダンツィヒとオランダとの間の密接な取引関係はしばしば「ダンツィヒ・オランダ枢軸」と呼ばれる[9]。

ダンツィヒを含むバルト海地域にオランダはどれだけの船舶を送っていたのであろうか。ズント海峡の通行税の記録から1600年前後における10年間ごとの通過船舶（バルト海向けと北海向け船舶の合計）の総数とオランダ船の合計数及びそれが全体に占める割合を求めると以下の表のようになる[10]。

表—2　ズント海峡を通過したオランダ船

1591—1600年	31578隻	そのうちオランダ船舶	21438隻（67.9%）
1601—1610年	45025隻	そのうちオランダ船舶	27167隻（60.3%）
1611—1620年	48958隻	そのうちオランダ船舶	34180隻（69.8%）

これらの記録から明らかなように，当時かくも多くの船舶がズント海峡を通過し，しかもその過半数はオランダ船によって占められていたことがわかる。また同じ期間にこの海峡を経て西ヨーロッパ方面に送られた穀物の年平均の総輸送量とオランダ船によって運ばれた穀物の量及びそれが全体に占める割合を求めると以下のようにまとめられる[11]。

表―3　ズント海峡を通過した西欧向け穀物（年平均）

1591―1600年	54308.4ラスト	そのうちオランダ船舶	35051.2ラスト	(64.5%)
1601―1610年	51296.3ラスト	そのうちオランダ船舶	38285.2ラスト	(74.6%)
1611―1620年	63677.7ラスト	そのうちオランダ船舶	53589.2ラスト	(84.2%)

注：1ラスト＝約2000kg

やはりここでもオランダ船舶が圧倒的なシェアを占めていたことが確認されるのである。16，17世紀になるとバルト海・北海貿易の主導権はハンザに代わってオランダが完全に掌握していたといえよう。

オランダ船舶によってバルト海から北海側に輸出された穀物の多くは，ひとまずアムステルダムに運ばれ，オランダ・低地地方で消費される分を除かれ，一部はスペイン，イタリアなど南欧地域に向けても再輸出された。オランダ船舶は，バルト海から大西洋，そして地中海に至るまでの航路を形成していき，ヨーロッパを取り囲む海域に海上貿易の動脈を形成していく。バルト海地域はまた，穀物だけでなく西欧・南欧で必要とされる基礎的な資源の供給地としての性格も帯びていった。なかでも海外進出の盛んなこの時代，船を作るために必要な木材や帆船ゆえに必要な帆やロープの素材となる麻，それに浸水を防ぐための詰め物として欠かせないタールなどは，東西両インド方面に進出していたスペイン・ポルトガルにとってのみならず，17世紀の海洋王国であるオランダでこそ不可欠な資源であった。バルト海から食糧や船舶資源が安定的に供給されることによってオランダは，その持てる力を，商業・海運に振り向け，更に毛織物をはじめとする工業をも発展させることができたのである[12]。

これに対して，バルト海・東欧側では，資源や食糧といった一次産品を

輸出する見返りとしてオランダ，西欧方面から毛織物に代表される工業製品や大西洋沿岸で生産される塩，それに植民地物産が，輸入の中で大きな比重を占めていく。オランダをはじめとする西欧諸国が，都市化と合わせて毛織物製造を中心とする工業化を推し進め，食糧・原料を主にバルト海・東欧から輸入するという構図が出現してくる。先に指摘した資本主義世界経済の形成に伴う役割分担，分業体制がヨーロッパの内部でも東西間の貿易関係を通じて打ち立てられていくのである。すなわち，オランダを中心とした西欧がヨーロッパ経済の中核地域として発展していく一方で，バルト海沿岸の東欧は，一次産品の供給地として西欧に従属していくことになる。西欧向け穀物輸出の増大とともに，プロイセンすなわちドイツ東部やポーランドでは，領主の農奴に対する人格的な拘束が16世紀以降再び強化されていく。農場領主制（グーツヘルシャフト）の確立とともに，いわゆる再販農奴制が後々まで維持され，しかも経済は，穀物に生産を特化させることにより，かなりの程度モノカルチャー化されてしまうことになる。かくして，この地域の近代化ははるかに遅れることになり，西欧に対する東欧の後進性，いわゆる低開発の状態は後の時代に至るまで未解決なまま残されていく。こうしたヨーロッパ内部に見られる南北問題は，20世紀になぜ社会主義政権が東欧で誕生したのかという問題とも無関係ではあるまい。

以上では，オランダのバルト海貿易における主導権確立の背景とその過程について具体的に検討し，さらにバルト海の穀物輸出地域が西ヨーロッパから見て辺境となる過程において，オランダの海運・貿易活動が重要な役割を演じていたということについても述べた。さて，バルト海貿易がオランダ経済発展の母といわれていることについては既に指摘した。ところが，そうであったにもかかわらず，収支だけを取り上げるとオランダのバルト海貿易は，実は赤字であったと考えざるを得ない[13]。赤字であったにもかかわらず，バルト海貿易は，なぜオランダ経済発展の母体となりえたのであろうか。その謎を解く鍵は，戦争の相手国であるスペインとの貿易にある。

Ⅲ．オランダの対スペイン貿易　―バルト海貿易の延長―

オランダはバルト海貿易を通じて独立戦争の相手国であるスペインと深く関係していた。自国で生産された毛織物に加え，穀物や木材その他多くのバルト海からもたらされた必需品の一部は，戦争相手のスペインに供給されていた。ここで注目したいのは，これら商品の対価としてスペインがオランダに供給した物が何かということである。それは貴金属の銀であった。

かねてから，ヨーロッパはアラビア商人などの手を経て東方オリエント・アジアの香辛料や絹織物，高価な細工品などを調達していた。しかしヨーロッパにはアジアから求められる商品，物産が十分存在しなかったので，貿易収支は常にヨーロッパ側の輸入超過，つまり赤字という状態が続いた。古代から見られるこうした状況は大航海時代以降も変わらない。香辛料をはじめとするアジアの物産を手に入れるために，ヨーロッパ側はその対価として大量の銀を必要としたのである。

やがて16世紀後半になると，ポトシ銀山などアメリカ新大陸で採掘された銀がヨーロッパに大量に流入していく。新大陸の支配に乗り出したスペインが，ペルーやメキシコで奴隷を酷使して大量の銀を生産し，それがスペイン本国を経由してヨーロッパに流通していき，いわゆる「価格革命」と呼ばれる物価上昇の一因となったことはよく知られている。ところが，これらの銀の多くは，戦費としてのほか外国からの商品輸入の支払いのために，さらには密貿易を通じてスペイン経済をあまり潤すことなく国外に流出してしまった。当時のスペインは「太陽の没することのない帝国」といわれたほど広大な領土を誇り，また莫大な量の貴金属を手にしていた。にもかかわらずこの国は，帝国としての地位を維持できず，国際収支や財政の悪化を通じて経済を破綻させてしまう。

さて，銀は「物価騰貴の悪影響」[14]のみを残してスペインから国外に流失してしまうのだが，これら銀の流出先として特に大きなウェイトを占めたと考えられる国，それがオランダである。新大陸貿易を支える船舶を作る

ために不可欠な木材や繊維資源，それに穀物などがバルト海から，しかもその多くがオランダの海運力によってスペインに供給された。こうした必要物資の供給からは，かなりの収益が見込まれたものと考えられる。例えば，17世紀前半，スペインの小麦価格は積出港であるダンツィヒの三倍から四倍に達していたため，運賃，保険，関税など必要な経費を差し引いても，スペイン向け穀物貿易からは，100%から200%前後の利益率を確保することができたという[15]。

さらにこれらバルト海産の資源に加えて，オランダからは手工業製品，なかんずく毛織物製品がスペインへ送られた。バルト海産品や毛織物と引き換えにオランダは，セビーリャやカディスといった港で銀を手に入れ，さらにイベリア半島から，ポルトガル産の塩，スペイン産の羊毛やワインを輸入した。オランダは毛織物工業を発展させていく上で原料の羊毛の輸入を欠かすことができなかったわけであるし，また大西洋の塩は，鰊を塩漬けして長期の保存に耐えるものとするためにも欠くことのできない商品であった。

一方，スペイン政府は銀の国外流出を防ぎ，さらに交戦相手のオランダを利することのないように貿易統制に乗り出す。しかし，政府の管轄下にない私的な貿易，密貿易というルートを通じて，銀は商品と引き換えにオランダ商人の手に流出し続けた。そもそもオランダが供給していた商品自体，スペインが必要としていたものだったので，同国政府も取引を強く禁じるわけにはいかなかったのである。1621年にはオランダ西インド会社が設立されたが，これなどは，はじめから新大陸から積み出されたスペインの銀の略奪を目的としていたといわれる[16]。

スペインからオランダ以外の国に渡った銀のかなりの部分も，やがては船舶や商人の活動を通じて運賃や手数料・保険料という形でオランダに流れ込んできた[17]。これもオランダがヨーロッパ随一の海運国，商業国家であればこそ実現され得たことであり，やがてこれらの銀がオランダ金融業発展の基礎となり，1609年にはアムステルダム振替銀行が設立される。イギ

リス，フランスそしてスペインといった当時の大国が貴金属の国内での蓄積を重視する重金主義的な政策を取っていたのに対して，オランダは貴金属の輸出を容認する自由主義的な貿易政策を優先させていった[18]。国外に流出した貴金属がさらなる富を国内にもたらすという自信があったからこそ，自由主義的な政策を打ち出すことができた。経済的実力があったがゆえに，オランダは，まずはその経済の分野で寛容であったといえないだろうか。ここに，グロチウスの唱えるいわゆる「海洋自由論」の生まれた背景の一端を探ることができる。貴金属の流動性が確保されていたがゆえに，オランダには投資の機会を求めてヨーロッパ各地から貴金属が流入してきた。これに貿易や運賃収入などから得た収入を合わせれば，恐らく莫大な量の銀がオランダに流入していたことであろう。銀塊ないしスペイン銀貨としてオランダに流入した銀[19]は，国内各地にある造幣所で銀貨になり，それが国際通貨として貿易の決済の際に用いられ，オランダの国外でも流通していった。

オランダは，先に指摘したバルト海貿易の赤字分，輸入超過分の支払いにこれらの銀を当てていた。もちろん，為替の利用などもあったであろうから輸入超過分のすべてが銀で支払われたとはいえないまでも，その銀の量はかなりのものであったと推測される[20]。しかもスペインとバルト海沿岸地域との間には，17世紀中頃まで銀の価値に大きな開きがあった。すなわち，新大陸からの銀が急速かつ大量に流入したスペインでは銀の価格がバルト海側と比べてはるかに安くなっていたので，オランダ商人は銀を安く手に入れて銀価格の高いバルト海地方にもたらせば，その差益は多い場合で50％程にも及んだのである[21]。バルト海産品のオランダ本国における必要性に加えて船舶の輸送や商業活動から得られる運賃・サービスからの収入，そしてスペインとの取引を通じて得られる大量の銀，さらに銀価格の地域格差から生まれる差益，これらを総合して考えれば，オランダにとってバルト海貿易は，赤字額を補ってあまりある収益をもたらしてくれる貿易部門，まさしく「オランダ商業発展の母」という呼び名にふさわしい貿

易分野であったと考えることができるのである。

銀の入手という点でオランダは，上述のようにバルト海貿易をバネに通商網を広げ，スペインの必要とするバルト海の物産を供給できたがゆえに他国と比べて有利な位置にあった。ところが，そのスペインが，東インドで香辛料貿易の拡大を画策していたポルトガルを16世紀後半から一時併合してしまうと，これまでリスボンから南ネーデルラントのアントウェルペンにもたらされていた東インド産の香辛料は，オランダに行き渡らなくなってしまった。これを一つの契機として，いよいよオランダも東インドへ進出していくことになる。

Ⅳ．世界経済における銀の流通とオランダ

東インド貿易において銀の存在は，オランダがこの領域で優位を打ち立てていくうえで大きな武器となった。すなわち，銀と引き換えに胡椒をはじめとする大量の香辛料が東インドからオランダにもたらされたわけであり，ここに銀と香辛料を媒介とする新大陸西インド貿易と東インド貿易との密接な関係を伺うことができる。この東西両インド貿易とオランダ経済の興隆との密接な関係については，我が国では大塚久雄先生によって早くから注目されていた。大塚先生によれば，オランダは毛織物工業という生産的基礎を土台としてスペイン領アメリカへ毛織物を輸出して銀を入手し，その銀を用いて東インドから香辛料を確保して世界商業における覇権を確立した，という構図が描かれるとされる。この著名な「三角貿易テーゼ」は，現在では，毛織物貿易の意義が強調されすぎているなど修正の余地があるものの[22]，銀の流通を通じて新大陸貿易と東インド貿易がオランダによって結び付けられていた点に早くから着目していた功績は大きいといえる。しかしその前提として，バルト海貿易という商業の母体が大きな意味を持っていたであろうことは，これまで述べてきたとおりである。

さて，ヨーロッパの東インド貿易は，アフリカの南端喜望峰を経由して

行われた。無論，オランダの場合も例外ではなく，ここを経由してアジアの物産が調達され，その対価として銀が東方へ流出していった。だが，世界経済における銀の流通に着目してみると，西から東へ向けた銀の経路はこの喜望峰ルートに限られない。古くからの東西貿易路であったレヴァント，つまり地中海東部地方を通じても銀は東方アジアに流れていたし，さらに穀物の対価としてバルト海方面にもたらされた大量の銀も，世界経済における銀の主要な流通経路をかたちづくっていた。A. アトマンによれば，オランダのバルト海貿易を通じて同海域に流入した銀の一部もロシアの内陸地域を経由してインド洋方面に達していたという。すなわち，喜望峰経路と地中海経路，それにバルト海経路の三つのルートが，貴金属の流通を通じてヨーロッパを東方と結び付けるうえで大きな意味を持っていたということになる[23]。

では，ヨーロッパから東方へどれだけの銀が流出していたのだろうか。ここでアトマンの推計値を見ておくと[24]，三つのルートを合計した銀の金額は1600年が約440万リックスダラー，それが1780年には1470万リックスダラーにまで増大した。一方，オランダを通じた銀の流れを見ると，同じく三つのルートの合計金額で，1600年が290万リックスダラーであったのに対して，それが1780年には800万リックスダラーにまで増大した。銀の流れ全体に占めるオランダの割合を見てみると，1600年が約65%，1780年が約55%となる。18世紀になると東インド貿易におけるイギリスの活躍が目立ってくるのでオランダの比重は下がってくるものの，それでも1780年の段階で，なおもヨーロッパから東方へ流出する銀の半分以上はオランダの取引と関係したものであったことが，ここからわかる。オランダが近世ヨーロッパの国際商業，さらには世界商業において揺るぎ無い位置を占めていたということは，このような銀の世界規模での流通からも確認することができるのである。

一般に，これら世界規模で流通する銀の最終目的地として考えられるのはインドと中国であるが，特に中国に向けて大量の銀が流入したとされ[25]，

地中海，バルト海に向かった銀の一部も最終的には中国に向かったと考えることができる。アジアに向けては，さらにメキシコのアカプルコからスペイン領のフィリピン・マニラに向けられた太平洋経由の銀の供給もあった。いずれにせよアジアの大国中国と通商関係を築いていくためには大量の銀を必要としたのである。ところが，オランダの東インド貿易がまさに拡大しつつあった17世紀になり，新大陸からヨーロッパに流入する銀の量が一時減少してしまった時期があった[26]。その際，銀の産出国として改めて脚光を浴びるようになった国があった。日本である。日本の銀は，既に16世紀にポルトガルによって主に東アジアの域内貿易のための決済手段として用いられていた。やがて17世紀にポルトガルが後退してオランダが東アジア地域で交易網を確立していく過程で，日本産の銀は，長崎のオランダ商館が買い付けた商品の中で一時期極めて重要な位置を占めるようになった[27]。これら日本産の銀も，やはりオランダのアジア域内貿易において商品調達の際に用いられた。

オランダを中心とした西欧諸国の東インド貿易が拡大しつつあった17世紀に，ヨーロッパからアジア東方へ向けられる銀の量は増加していた。一方，この頃のバルト海貿易を見ると，西欧からバルト海方面に向かった銀は以前と比べて減少傾向にあった。バルト海貿易でポーランドは対西欧貿易で赤字を計上するようになり，代表的な貿易港であるダンツィヒさえも収支を悪化させていたという[28]。従って，バルト海貿易では以前ほど銀が必要とされなくなり，その分がアジアに向けられるようになったとも考えられる。もちろんバルト海貿易で節約できた銀と日本産の銀を合わせただけで，東インド貿易において必要とされる銀を賄うことは到底できなかったであろうが，アジアの域内で銀が確保されるようになったことの意義は大きかった。また，我が国にとっても銀を媒介として周辺諸国との結びつきが保たれたという点で，オランダ東インド会社による日本産銀の取引はきわめて大きな意味を持ったと考えることができよう。

さて，オランダによる急速な銀の国外流出に危機感を抱いた日本は，1668

年に銀輸出禁止令を発令した。この後，銀に代わって出島オランダ商館の重要な輸出品となったのは銅である。銅は，我が国のみならず17世紀のヨーロッパ国際商業界においても最重要商品の一つであり，日用品以外にも兵器や貨幣の素材として戦略的な意味合いを持つ商品でさえあった。当時ヨーロッパにおける最大の銅産出国は，それまでの中部ドイツやハンガリーからスウェーデンに移りつつあった。スウェーデン産銅はバルト海貿易の主要商品でもあり，その多くは，かつてのハンザの盟主であるリューベックを経て，当時の最大の取引所があるアムステルダムに輸出された。先にオランダのバルト海貿易との関連で取り上げたリューベックは，オランダのバルト海進出ゆえに東西貿易の動脈から外れることになったとはいえ，北欧諸国とリューベックとの取引関係は，むしろ以前と比べて強化されていく。それはさておき，こうした状況の中，日本産の銅はバタヴィアのオランダ商館を経て一部はアムステルダムにまで達した[29]。日本産の銅がヨーロッパでどのように用いられたかは不明だが，銅そして銀といった鉱産資源の流通を通じて江戸時代の日本はオランダの通商網に組み込まれていた。もちろんこれ以外にも様々な商品が長崎からアジア各地さらにはオランダ本国にまで搬送されていたのであり，鎖国下にあったとはいえ，日本も遥かヨーロッパと結ばれ，近世オランダのグローバルな商業の網の目の一角を成していたのである。

結　　び

以上の報告では，17世紀のオランダがどのような事情で世界の商業に君臨し，日本にまで通商網を拡大することができたのか，その理由をヨーロッパ世界経済を視野に入れながら述べてきた。オランダ経済発展の理由を探るための分析の切り口は様々あろうが，ここでは二つの点に注目した。すなわち，①バルト海貿易がオランダ商業発展の母体となったであろうということ。そして，②そのバルト海貿易の延長として，オランダは対スペイ

ン貿易を通じて新大陸産の銀を獲得し，世界市場における銀の流通に深く関わることができたということ。この二点を中心に話を進めてきた。本報告は今回のシンポジウムの趣旨である「寛容と平和」に直接関係するものではなかったが，オランダを素材として「寛容と平和」について考えるのであれば，17世紀のこの国の一般的な繁栄を支えた経済・商業的条件を無視することはできないだろう。経済に裏打ちされた繁栄が，いかなる「寛容と平和」の精神を育み，またその精神が，交渉さらには戦争を通じて諸外国との関係にどのような影響を与えたか，このような点を考えていくことが次の課題になるであろう。本報告がそのための一助になればと思う。

さらに本シンポジウムのテーマとの関連で一言付け加えておきたい。オランダと日本との出会いは，大航海時代に端を発する航海・探検事業の一環として位置づけられる。これらヨーロッパ人によって展開された航海・探検は，ヨーロッパと世界各地とを結び付け，世界経済・世界市場の形成を促す一方，その副産物として様々な学問，特に博物学を発展させた。そもそもこの博物学自体，人々にとっての有用な資源，特に薬物の発見や新たな商品の開拓といった使命を担うことにより，本草学や物産学を通じて経済と大きく関係する当時の総合学であったといえる。やがて博物学はこうした有用の学としての側面，つまり実学的な側面を払拭して純粋科学となり，近代生物学へと脱皮していくのであるが，まず博物学で何よりも必要とされるのは，総合学としての可能な限りの情報と標本の収集，すなわちコレクションであった。やがてコレクションが多くなり過ぎ，情報が錯綜してくると，差異に注目しながら何らかの価値観に基づいた分類を行なうことが必須の課題となるが，博物学であれば，まずは標本であれ情報であれ，資料を広く収集するという行為が大きな意味を持つ。そのためには，先入観に囚われず，まさしく寛容の精神を持ってすべての資料を平等に扱うことが必要となる。言わば博愛の精神が求められるのである。近世・近代という時代は，ヨーロッパ周辺の各地で植民地化が進むことによって経済的な不平等が拡大し，しかも戦争が多発するどちらかというと血なまぐ

さい時代であった。加えてヨーロッパ人自身が，自然に対してはキリスト教に基づく人間中心の自然観を，また人類に対しては文明・野蛮の二項対立によるヨーロッパ中心の文明観を抱くことにより，ある面では差別的な眼差しを育んできた時代でもあった。だが，そうしたなかにあって，博物学の眼差しというものは，元々は人々が本来持つ素朴な好奇心に基づく極めて寛容・平和なものであったはずである。このような性格を持つ博物学が，近世経済の展開と歩調を合わせて日本でも著しい発達を見せ，しかも蘭学を通じて日蘭交流においても大きなウェイトを占めたということを最後に申し添えておこう。

注

1）白水隆・黒子浩『蝶・蛾』，標準原色図鑑全集第1巻，保育社，1966年，19頁。

2）報告当日は配布資料の中に参考文献表を設けていたが，本稿では省略している。以下の注で言及されるものを除いた参考文献をここで挙げておく。(報告の後に刊行された新しい文献を若干加えている。) 石坂昭雄「オランダ共和国の経済的興隆とバルト海貿易（1585—1660）　—ズント海峡通行税記録の一分析—」，日蘭学会編『オランダとインドネシア　—歴史と社会—』，山川出版社，1986年所収。C. ウィルソン（堀越孝一訳）『オランダ共和国』，平凡社，1971年。高橋理『ハンザ同盟—中世の都市と商人たち—』，教育社歴史新書，1980年。田口一夫『ニシンが築いた国オランダ　—海の技術史を読む—』，成山堂書店，2002年。M. タールト（玉木俊明訳)「17世紀のオランダ　—世界資本主義の中心から世界のヘゲモニー国家へ？—」及び玉木俊明「コメント　オランダのヘゲモニーをめぐって　—タールト論文への若干の疑問—」，松田武・秋田茂編『ヘゲモニー国家と世界システム—20世紀をふりかえって—』，山川出版社，2002年所収。M. タールト（大西吉之訳)「講演要旨 オランダはなぜかくも急速に大国の地位に登り詰めたのか？(1550—1650年)」，オランダ史研究会ホームページ（http://home.att.ne.jp/blue/holland/thartj.html)。角山榮「オランダの繁栄と日本の銀」，『適塾』第23号，1990年。A.G. フランク（山下範久訳）『リオリエント　—アジア時代のグローバル・エコノミー—』，藤原書店，2000年。湯浅赳夫『文明の「血液」　—貨幣から見た世界史—』，新評論，1988年。A. Attman, *Dutch Enterprise in the World Bullion Trade 1550-1800*, Göteborg, 1983. W.P. Blockmans, Der holländishe Durchbruch in der Ostsee, in: *Der Hansische Sonderweg?*, hg.v.S. Jenks u.M. North, Köln/Weimar/Wien, 1993. P. Dollinger, *Die Hanse*, 4. erweiterte Auflage,

Stuttgart,1989. J.I. Israel, *Dutch Primacy in World Trade, 1585-1740*, Oxford, 1989. H. Kellenbenz, Spanien, die nördlichen Niederlande und der skandinavisch-baltische Raum in der Weltwirtschaft und Politik um 1600, in: *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 41-4, 1954.

3）I. ウォーラーステインの代表的な著作として，川北稔訳『近代世界システム　―農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立―』Ⅰ，Ⅱ，岩波書店，1981年，川北稔訳『近代世界システム　1600―1750　―重商主義と「ヨーロッパ世界経済」の凝集―』，名古屋大学出版会，1993年，川北稔訳『近代世界システム　1730―1840s　―大西洋革命の時代―』，名古屋大学出版会，1997年を挙げておく。17世紀のオランダに関しては，『近代世界システム　1600―1750　―重商主義と「ヨーロッパ世界経済」の凝集―』の第二章（「「世界経済」におけるオランダのヘゲモニー」，43-89頁）で述べられている。

4）ウォーラーステインによれば，オランダは1625年から1675年にかけてヘゲモニーを掌握した。オランダのヘゲモニーに関しては，玉木俊明「オランダのヘゲモニー」，川北稔編『ウォーラーステイン』，講談社選書メチエ，2001年，103-121頁を参照。

5）松井透『世界市場の形成』，岩波書店，1991年，93-95頁。

6）栗原福也「世界市場アムステルダムの成立とオランダ経済の特質」，『社会経済史学』，第37巻第1号，1971年，31頁。

7）中世の街並みの残る旧市街はユネスコの世界遺産に登録されている。

8）詳しくは，拙稿「ハンザ盛期におけるバルト海・北海間の内陸交易路　―リューベック・オルデスロー・ハンブルク―」，『社会経済史学』，第63巻第4号，1997年，88-107頁を参照。

9）拙稿「近世初頭のバルト海貿易　―リューベックとダンツィヒ―」，『早稲田経済学研究』，第35号，1992年，79-93頁を参照。

10）玉木俊明「〈史料紹介〉『ズント海峡関税台帳』前編　―1560－1657年―」，『文化学年報』，第41号，1992年，138頁，表―1。

11）玉木俊明「バルト海貿易（1560―1660）　―ポーランド・ケーニヒスベルク・スウェーデン―」，『社会経済史学』，第57巻第5号，1992年，42頁，表―5。

12）とはいえ，M. モリノーのように，バルト海産穀物貿易の重要性を無批判に強調する動きに警鐘を促す流れも存在する。詳しくは，佐藤弘幸「穀物と毛織物　―17世紀のオランダ経済―」，『東京外国語大学論集』，第40号，1990年，261-280ページを参照。

13）例えば，「ダンツィヒ・オランダ枢軸」の一方を成すダンツィヒの17世紀前半の貿易収支が大幅な黒字であったことは，オランダ側の赤字を推測させる。石坂昭雄ほか『商業史』，有斐閣，1980年，88頁，表8－3。但しそのダンツィヒもやがて貿易収支を悪化させていったという。以下の注28の箇所の本文を参照。

14）前掲書，77-78頁。

15）石坂昭雄「オランダ共和国の経済的興隆と17世紀のヨーロッパ経済　―その再検討のために―」，『経済学研究（北海道大学）』，第24巻第4号，1974年，31頁。

16）大塚久雄「17世紀初頭におけるオランダ商業資本躍進の経済的基礎」，『大塚久雄著作集』第10巻（第2巻補遺）所収，岩波書店，1970年，502頁。

17）この点については，我が国では既に以下で指摘されている。玉木俊明「貨幣から見た16・17世紀の世界史とオランダ　―17世紀の危機に関する一考察―」，『歴史科学』，第119号，1990年。

18）オランダ経済の自由主義的な側面に着目した研究に以下がある。湯浅赳夫「最初の自由貿易国家オランダ　―重商主義前史―」，『新潟大学経済論集』，第58号，1994年，143-153頁。

19）栗原福也「オランダ経済の興亡」，角山榮・川北稔編『講座西洋経済史　Ⅰ工業化の始動』，同文舘，1979年所収，159頁。

20）例えば，石坂昭雄ほか『商業史』，76頁，図―7-4を参照。

21）石坂昭雄「オランダ共和国の経済的興隆と17世紀のヨーロッパ経済」，31頁。

22）例えば，栗原福也「世界市場アムステルダムの成立とオランダ経済の特質」，31頁を参照。

23）例えば，A. Attman, *American Bullion in the European World Trade 1600-1800*, Göteborg, 1986, pp.74-78, A. Attman, *The Bullion Flow between Europe and the East, 1000-1750*, Göteborg, 1981. pp.92, 111 を参照。

24）A. Attman, *American Bullion*, pp.76-77, Table Ⅳ-1, Ⅳ-2.

25）以下で中国人の銀に対する偏愛が指摘されている。F. ブローデル（山本淳一訳）『物質文明・経済・資本主義　15世紀―18世紀　Ⅱ―1　交換のはたらき　1』，みすず書房，1986年，240―241頁。

26）A. Attnam, *Ammerican Bullion*, p.78, Table Ⅳ-3. 1650年のイベリア半島向け貴金属流入量を参照。また，*Ibid*., p.34 も参照。

27）日蘭貿易における銀取引について詳しくは，本シンポジウムの報告者の一人である八百啓介先生の『近世オランダ貿易と鎖国』，吉川弘文館，1998年を参照。

28）M. North, Bullion Transfer from Western Europe to the Baltic and the Problem of Trade Balance: 1550-1750, in: *Precious Metals, Coinage and the Changes of Monetary Structure in Latin-America, Europe and Asia*, ed. E. Van Cauwenberghe, Leuven, 1989, p.62.

29）詳しくは，K. Glamann, The Dutch East India Company's Trade in Japanese Copper 1645-1736, *Scandinavian Economic History Review*, 1, pp.41-79, 1953 を参照。